

和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2018
10.1

36号

巻頭言……………1 / 総会・記念講演会……………2-7 / 田村市植林視察……………8-10 /
和名倉山森づくり報告……………11-12 / 長瀬町宝登山下刈り活動報告……………13 /
平成30年度 第11回通常総会開催……………13

神になったオオカミの特別展を見て

理事長 小林 公彦

百年の森づくりの会がフィールドとしている和名倉山では植栽したブナなどの樹皮がシカに食べられる被害を受けています。日本各地でシカの害獣被害が起きている。また、最近ではシカが増え続けていくという中で、シカの天敵だったオオカミが脚光を浴びていろいろ報道されています。

百年の森づくりの会では、二〇一二年に「鹿の食害を考える」をテーマに、日本オオカミ協会の丸山直樹会長を招き、基調講演でオオカミの導入について熱く語っていただき、パネルディスカッションでは四名の方々にオオカミ導入についての是非論をお話いただきました。

また、二〇一六年には、野外調査研究所長の吉川國男氏に「秩父山地とニホンオオカミ」というテーマで、秩父山地におけるニホンオオカミの存在についてお話をいただきました。

そして今年の総会の記念講演会では、民俗的立場からオオカミを知ろうということで、埼玉県立川の博物館の大久根茂氏に「神になったオオカミ」というテーマでお話を聞く機会を得ました。講演録は会報に掲載していますので、是非ご一読ください。

実は、昨年七月から九月に川の博物館

で、オオカミの展示会を開催していることを知り、早速特別展を見に行ってきました。この企画をしていたのが、大久根茂氏でした。

埼玉の母なる川、荒川上流に広がる秩父山地はかつてオオカミの生息地であり、秩父山地一帯には、「お犬様」と称してオオカミを祀っている神社が多数あります。秩父地域に、何故オオカミ信仰が多くあるのか、オオカミにまつわる伝承や伝説が数多く残っているのか、特別展示会と記念講演会での大久根茂氏の話を聞いて少し理解できたような気がいたします。

特別展では、秩父地域にはオオカミを祀る神社が数多くあり、神として崇められたオオカミについて、じっくり展示物や写真を見ることが出来ました。ニホンオオカミの剥製も展示されていました。意外と小さいのにびっくりしました。

また、オオカミが描かれている絵画や掛軸も展示されていました。オオカミのイメージである大きな口と鋭い牙の怖い印象はなく、神として崇められていたことが影響しているのか、何か愛くるしく見える掛軸などもあり、大変興味深く拝見することができました。

大久根茂氏の講演を聞いて、秩父山地における人とオオカミとの関わり、そして秩父地域にオオカミ信仰が多く残ったのには、神社が大きく関わっていたことが良く分かりました。

埼玉県の調査によるとシカの被害は、平成二十四年は二十五haでしたが、どんどん増えて、平成二十八年は三十七haに及んでいるそうです。また、ニホンシカの生息数は正確に把握することは困難なようですが、二〇一二年度末で約一万頭と推定されています。

秩父地域でシカによる農林被害が進行・拡大していて、秩父山地の地形は急峻な地形をしているため、シカなどの食害で林床植生が失われると大雨の際に表土が流れやすくなり、急傾斜地では土砂崩れが起きやすくなるそうです。

埼玉県では、森林生態系の保全を目的としたニホンシカの管理と年間捕獲数三〇〇〇頭を目標として捕獲の強化に取り組んでいるようです。

オオカミの導入は、現実的には難しいのではないかと思いますし、捕獲の担い手である狩猟者の育成に期待しつつ、百年の森づくりの会はボランティア団体として、我々の活動が自然生態系の保全の一助になればと思っています。

平成30年度第11回通常総会・記念講演会 平成30年6月3日

神になったオオカミ

秩父山地のオオカミとお犬様信仰を知ろう

はじめに

昨日まで一泊で奥秩父の金峰山と瑞牆山を歩いて来ました。先ほど鹿の食害について話をされていました。が、富士見平小屋という山小屋に泊まって夕食に出たのが鹿肉のソーセージでした。美味しかったです。八ヶ岳の鹿だそうです。奥秩父にもいっぱい鹿はいるのに、何で秩父の鹿ではないのか聞いたところ、秩父の鹿は樹皮を食べているのでまずいとのこと。秩父山地では鹿の食害で樹皮が剥がされているという話を聞いていただけに、なるほどと思ったものです。

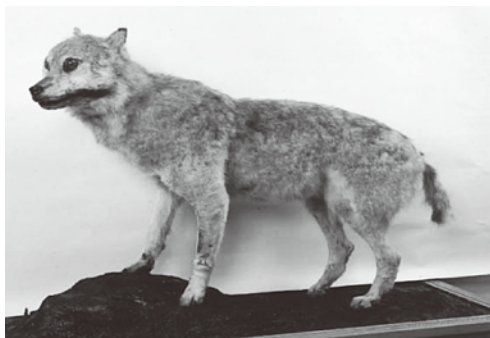
山歩きが好きで秩父の山はほとんど登りましたが、一つだけ登っていないのが、この会で植樹活動をしている和名倉山です。ただ会がベースにしている仁田小屋付近は歩いたことがありません。「全国巨樹巨木林の会」の会員のため、巨木を探してあのあたりの山中を歩き回ったのですが、残念ながら見つかりませんでした。和名倉山に入ったのはそのときだけなので、できれば元気なうちに山頂まで行ってみたいと思っています。

吉川國男さんが何年か前にオオカミについて、この会で講演されたようですが、吉川さんはニホンオオカミの存在そのものについてお話しされ

ていたかと思っています。私の場合は民俗学が専門ですので、今回はオオカミにまつわる信仰を中心に話してみることになりました。

川の博物館でのオオカミ展

以前からオオカミについて展覧会で取り上げてみたいと思っていたのですが、昨年七月から九月にかけて、寄居町にある県立川の博物館で実現することができました。特別展のタイトルは「神になったオオカミ」と秩父山地のお犬様信仰」というものです。川の博物館で何故オオカミなのかという点については、オオカミ信仰は秩父地域に集中しており、秩父山地は荒川の源流にあたるということと理由付けしたものです。



(資料1) ニホンオオカミの剥製



埼玉県立川の博物館 研究交流部長

大久根 茂

この特別展の目玉資料として、ニホンオオカミの剥製を展示することが出来ました。ニホンオオカミは明治時代半ばに絶滅したとされ、日本にある剥製は三体だけです。うち一体が和歌山大学教育学部の所蔵で、これを今回お借りすることができました。日通の美術品専用車で輸送したわけですが、先方が提示した条件が非常に厳しく、輸送中を含めて警備の問題、温湿度や照明の問題など一つずつクリアして借りることが出来ました。このニホンオオカミは明治三十七年ごろ奈良県の大台山系で捕獲されたものです。体長約百cmで、タイリクオオカミに比べ小型だったことがわかります。(資料一参照)

今回の特別展では二つの発見がありました。一つは、三峯神社所蔵の河鍋暁斎が描いた御神犬(オオカミ)の掛軸です。暁斎は江戸時代末期から明治にかけて活躍した日本画家で、自らを「画鬼」と称していました。この絵は暁斎のこれまでの作品リストに載っていないもので、三峯神社でもそんな貴重な資料とは知らなかったようです。(資料二参照)

もう一つは、小鹿野町の龍頭神社に奉納されたオオカミの木像です。木像の台座に滋賀県愛知郡蛭谷村の



(資料3) 龍頭神社に奉納されたオオカミの木造



(資料2) 川鍋暁斎が描いた御神犬

小椋と書かれた銘があり、滋賀県の木地師が秩父にやって来て彫ったものであることが分かりました。木地師学会というのがありまして、ある会員がこれを見て、木地師が彫ったオオカミ像は初めて見たと言っていました。(資料三参照)

それから、この木像は長野県小県郡長瀬村の講中が奉納したものとなり、分かった。長瀬村から龍頭神社までの道筋を見ると、鉄道も車もない時代ですと、千曲川を遡って佐久、佐久から十国峠を越えて上野村、そしてさらに志賀坂峠を越えてきたものでしょう。上野村から十国峠を越えて佐久に出るといのは、秩父事件の際に困民党が辿った道と同じです。

そんなこともあって反響が大きい特別展となりました。川の博物館始まって以来の入館者数と展示図録の売り上げを記録しました。ビックリしたのは、このオオカミ展の情報がSNSで拡散したことで、関西や東北地方からも展示を見に来ていただきました。

ニホンオオカミはいる？いない？

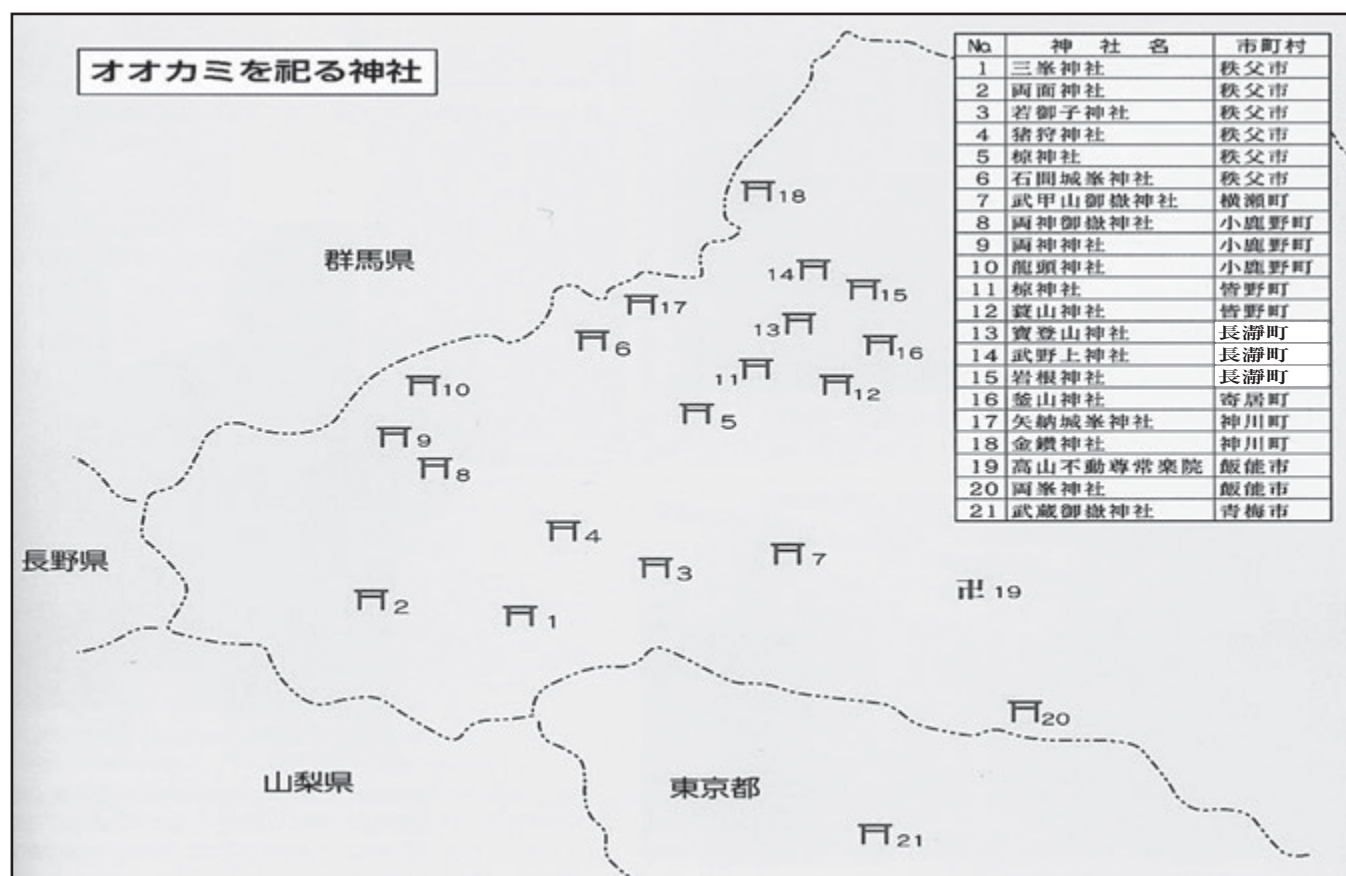
タイリクオオカミ、エゾオオカミ、ニホンオオカミの違いを見てみましょう。タイリクオオカミは今も世界各地に生息しています。エゾオオカミは北海道にいたのですが、明治の半ばに絶滅しています。ニホンオオカミも明治の半ばに絶滅しています。三者の大きさはかなり違ってきます。コピー用紙で例えると、A四版がタイリクオオカミ、B五版がエゾオオカミ、A五版がニホンオオカミといったところでしょうか。

ニホンオオカミはそれ程大きくないので、単独で家畜や人を襲う力はなかったとされています。明治に入って教科書やグリム童話などで、オオカミは怖いものだと思え付けられてきました。これは大陸のオオカミのことであって、国内各地に伝わる伝説や言い伝えをみると、日本のオオカミは決して恐ろしい害獣ではなかったことがわかります。

ニホンオオカミは明治三十八年(一九〇五年)に奈良県で捕獲されたのが最後です。エゾオオカミの場合もほぼ同じころに絶滅しています。エゾオオカミの場合は絶滅の理由がはっきりしています。あちこちで家畜を襲ったため、人間が鉄砲と毒薬を使って次々に殺し、エゾオオカミは絶滅してしまいました。

一方、ニホンオオカミの絶滅理由は明らかではありません。人間が鉄砲で殺してもいるのですが、最大の原因は野犬に広まった伝染病がニホンオオカミにも伝わって、次から次へとやられてしまったのではないかとされています。

ところが、絶滅後もオオカミを見た！声を聞いた！という方が少なからずいます。上尾市の八木博さんという方をご存じでしょうか。時々新聞や雑誌やテレビなどに取り上げられています。八木さんは何十年前も前からニホンオオカミを探して、特に奥秩父に調査に入っています。あちこちに無人カメラを設置して、動物が通るたびにシャッターが切れるようににしたとか、タイリクオオカミの遠吠えを山中に流して反響がないか調べていますが、いまだ結果は出て



(資料4) オオカミを祀る神社の分布

いないようです。

ニホンオオカミが絶滅したということで、タイリクオオカミの再導入を唱えている人達がいます。日本オオカミ協会という団体です。山では鹿による被害が多く発生しています。鹿が、鉄砲撃ちが減ったこともあってなかなかそれに対応出来ていない。鹿の被害を防ぐためには、タイリクオオカミを日本に持ち込んで山野に放し、猪や鹿をやっつけてもらうのが一番で、それしか方法はないと訴えています。ただ両者の体格には余りにも大きな差がありますし、何よりも種の問題が大きいです。再導入による家畜や人間への被害は本当にないのか不安ですし、異なる亜種を導入することへの反対意見が少なからずあるのです。

秩父山地のオオカミ信仰

オオカミを祀る神社の分布は資料四のとおりです。この図は秩父山地での分布を示したもので、全部で二十一か所。No.19飯能市の高山不動常楽院以外はすべてが神社です。全国を見てもこれだけ集中しているところは他にありません。なかでもNo.1三峯神社は、秩父におけるオオカミ信仰の中心になっています。

オオカミ信仰は荒川源流の秩父山地に多いという話をしましたが例外もあります。No.18の金鑽神社は利根川水系の神流川（かんながわ）流域ですし、No.21の武蔵御嶽神社は多摩川の流域になります。No.19の高山不動常楽院とNo.20の両峯神社はいずれも飯能市の山中にあります。この二つは入間川の流域になるわけですが、入間川は荒川の支流ですから広

い意味では荒川水系に入るわけですね。

この二十一か所すべてに、狢犬のような形でオオカミの石像が社拝殿の前や参道にあります。オオカミの姿を刷ったお札も発行しています。今回調査の段階で二十一か所のオオカミの像を写真に撮って記録し、お札も全部集めました。お札の収集はなかなか大変でした。今ではほとんどが印刷になっていて、昔ながらの手刷りのところは本当に少なくなっています。昔は作っていたけど今は作っていないという神社もありました。役員の方がたまたま家に持っていたのを提供してもらったところもあります。神主さんや総代さんへの連絡がつけにくかったり、祭りの時しか関係者が神社に来ないところもあって、お札一枚集めるのも大変な苦勞がありました。

集めたお札にはどれにもオオカミが描かれています。オオカミの表情や姿が少しずつ違っていて、非常に面白いですね。呼び方はお犬様、御神犬（ごしんけん）、大口真神（おおくちのまかみ）などさまざまですが、どれもオオカミを表したものです。お犬様と呼んでいる神社が多いのですが、三峯神社では御神犬と言っています。大口真神は大きな口の神様ということで、オオカミを神として呼ぶときの名前になっています。（資料八参照）

いるかというところでもなく、お犬様と呼んだり大口真神と呼んだりして、そのあたりは明確ではありません。

三峯神社とオオカミ

最近、三峯神社が「オオカミ神社」になった感があり、売店にはオオカミグッズがたくさん並べてあります。今から十六年前の二〇〇二年に、秩父市内の個人の家からニホンオオカミとされる毛皮が見つかりまして、それが三峯神社に寄贈されました。更に同じ年にもう一軒からも同じような毛皮が見つかって、それも三峯神社に寄贈されました。また、上尾市の八木さんが客員研究員として加わり、あちこちからオオカミ関連の資料を集めて三峯神社の境内にある博物館に展示していますので、オオカミに興味のある方はぜひご覧ください。

三峯神社が有名になったのは、江戸時代の半ばからです。それ以前から三峯信仰はありましたが、一時期衰退してしまいました。それを盛り返すためにオオカミによる御利益を利用したことで成功したのです。ひとつは火伏せの信仰です。特に江戸との関わりが強く、江戸で大火が起きるたびに三峯神社への信仰が高まっています。もうひとつは猪や鹿の害に悩んでいた農家の猪鹿除けの信仰です。また、町場でも農村でも金銭や作物の盗難除けをオオカミに託すという信仰もありました。こうして次から次へと三峯信仰は広まってきました。ただ、古く遡ると両神神社の方が三峯神社よりも脈わっていたという江戸時代の記録もあり

ります。

三峯神社のオオカミ信仰に関して面白い記録があります。幕末にコレラが蔓延したことがあり、江戸も含めて何万人もの死者が出ました。いろいろな対策を施したもののコレラを防ぐことが出来ず、次から次へと人が死んでいく。ちょうど黒船が日本にやって来たときだったので、黒船が連れてきたアメリカギツネという魔物が原因だという噂が立ちました。アメリカギツネを退治するにはどうしたら良いのか。オオカミだったらギツネをやっつけてくれるだろうということで、三峯神社にお参りをしてオオカミのお札をいただいて持ち帰り、コレラを防ごうとした。そういう記録がたくさん残っています。

例えば富士山の裾野のある村では、コレラが蔓延したので村人が三峯神社に代参に行っているのですが、そのコースが凄いです。今の裾野市から北に向かい、山越えて甲州に入ります。そこから奥秩父の雁坂峠を越えて栃本に下ったあと三峯神社へと登っています。神社で一泊し、お札をいただいたあとは、同じ道を通るのはまずいと思つたのでしょいか、秩父大宮から所沢、さらに八王子を通って村に戻ったという記録があります。

三峯神社で出していたお札には個人の家で受けるお札とは別に、講社や集落を守ってもらうための特別なお札がありました。表には「御眷属拝借之牘」とあり、さらに「お犬一疋」と書いてあるものもありました。この場合の「お犬一疋」は生き

たオオカミを表わすものとされていまして、お札を入れる箱にはオオカミが息をするための小穴まで開いていました。そして借りて来たからには返さないといけない。一年間働いてもらったら翌年神社に行ってお返しし、また新しいお札（オオカミ）を借りてくるというわけです。これを考え出したのが江戸時代半ばのこととで、それで一気に三峯信仰が広まった。商売上手だった訳です。

お炊き上げの神事

オオカミを祀る神社では、月に一回か二回、オオカミに食べ物を供える「お炊き上げ」という神事を行っているところがあります。かつてはあちこちの神社でやっていたのですが、現在でも続けているのは三峯神社と長瀬の宝登山神社だけのようにです。三峯神社の場合は境内の近いところに近宮（ちかみや）、少し離れたところに遠宮（とおみや）というお社があつて、月に一回ずつ小豆飯を供えています。近宮は神社の周辺にいるオオカミを祀り、遠宮は遠くで働いてくれているオオカミを祀っているとのこと。

宝登山神社では毎月七日に神事を行っています。拝殿の前にかまどを用意し、そこでご飯が炊き上がるまで拝殿の中では神官と信徒の人たちが祝詞を唱え続けます。ご飯が炊き上がるに参加者一同で食べ、そのあと宝登山の山頂にある奥宮に持って行ってオオカミに供えています。

寄居町の釜伏峠にある釜山神社でも、毎月十七日にお炊き上げを行っています。ここでは洗米を桶に入れて供えるのですが、供える場所に

行くには岩場の上り下りがあり、宮司さんが高齢になったので数年前にやめたという話を聞きました。

オオカミの剥製

日野市にある多摩動物公園ではタイリクオオカミを十頭ぐらい飼っています。タイリクオオカミは大きいので迫力がありますね。ただし「ウオーン」という遠吠えは、いつでも聞けるわけではありません。遠吠えは朝方に多いと聞いたので、動物園にお願いして開園前に入れてもらい、撮影したビデオを展示会場で流すことが出来ました。特に開園を知らせるチャイムが鳴ると一斉に啼き出します。ただ開園と同時に啼き出しても、オオカミのいるところまで十分ぐらいかかるので、その時には啼き止んでいます。その後はお昼寝タイムに入ってしまう、なかなか聞くことができないようです。

エゾオオカミは北海道にたくさんいたのですが、家畜を襲う害獣として駆除され、明治時代に絶滅しました。剥製が北海道大学に二体だけあります。この剥製の写真を見ると体に黒い穴があります。多分鉄砲で撃たれた跡ではないでしょうか。非常に精悍な、オオカミらしい顔をしています。剥製にするには肉も骨も眼球も取り除き、皮だけにしてから再生させるので、職人さんの腕によって表情や体型は大きく変わってしまうようです。

国内には二ホンオオカミの剥製は三体しかありません。一つは上野の国立科学博物館です。常設展示の中で飾られ、「これが日本にいたオオカミ。絶滅した！」と説明されている。

ました。もちろん借用することはできませんでした。もう一つは東京大学の農学部にありました。ガラスケースに入って農学部長の部屋に飾ってあり、保存環境が良くありません。気になったのは四つ足の先が四本とも継いだように色が変わっていること。何かの理由で足先が無くなっていたので他の動物の足先を継いだように見受けられます。全体として胴長短足です。保存状態が良くないので貸出しできないと言われてしまいました。

もう一体は和歌山大学教育学部が持っていました。遠方のため輸送費もかかり、しかもいろいろ細かい条件を付けられたのですが、何とかクリアして借りてくることができました。幸い三体の中ではこれが一番状態が良く、体型も他の二体よりも大きくて二ホンオオカミらしい剥製でした。和歌山大学では良い保存場所がないということで、和歌山県立自然博物館に寄託し、博物館では年に一回だけ公開しています。

オオカミの毛皮

明治三十八年に奈良県で捕獲された最後の二ホンオオカミの毛皮が、イギリスの大英自然史博物館に保管されています。何でイギリスにあるのかということですが、当時イギリスの動物学者が動物の収集を目的に日本に来ていたのです。奈良県を回っていたとき、たまたま地元の人を持つて来たのが二ホンオオカミでした。値段の交渉に難航したそうですが、買ったのち解体されてイギリスに送られました。学術的にはこれが最後の二ホンオオカミとされています。

す。

二ホンオオカミが最後に捕獲された場所、奈良県東吉野村には、村が記念に立てた銅像があります。銅像を立てた時にはすでに二ホンオオカミはいないわけですから、どこまで写実的に出来るのか製作者は非常に悩んだと聞いています。いろいろな資料を集め、より信憑性のある姿にしたということです。

国内にある毛皮は三峯神社の二体だけです。ご覧になりたい方は、三峯神社の博物館に行けば見る事が出来ます。

オオカミの頭蓋骨

秩父山地から丹沢山地にかけての一带には、オオカミの頭蓋骨を持っている家がたくさんあります。確認できているのは二十軒ほどで、秩父地方でも三軒に残されています。



(資料5) オオカミの頭蓋骨

写真には長瀬町のお宅にあるもので、魔除けに使われていました。特に狐憑きなどの憑き物落としに使われていたようです。自分の家に狐憑きにかかった者がいると、この頭蓋骨を借りてきて、オオカミの力で憑き物を落としてもらおうとしたものです。このお宅には大正十二年の頭蓋骨貸出帳も残っています。絶滅したとされる年からだいぶ経っているのに、頭蓋骨に対する信仰は相変わらず続いていたのです。（資料五参照）

その帳簿の表紙には「狼頭神」とあります。頭蓋骨でありながら神様扱いなのです。そして何月何日に誰々に貸したという記録が残っています。また、頭蓋骨の鼻先が削られています。借りた家では骨を少しだけ削り取り、煎じて病人に飲ませることがあったので、こうなってしまうのだそうです。秩父市内にある別の家の頭蓋骨の場合も、やっぱり鼻のあたりが削られていました。

描かれたオオカミ

畳一枚ほどの大きさに二頭のオオカミを描いた絵があります。森玄黄斎が描いたものです。小鹿野出身の玄黄斎は、細密な彫刻を得意とする彫刻師で、米粒に彫刻したという話も伝わっています。絵画も多く描いていて、これは多分雄と雌のオオカミでしょう。前足の途中に爪が描かれています。狼爪（ろうそう）と言ってオオカミの絵にはたいていこの爪が描かれているのですが、実際はオオカミだけのものではなく、他のイヌ科の動物にもあるとのこと。ただ昔の人はオオカミにしかないもの



（資料6）森玄黄斎が描いたオオカミ

と考えていたようです。絵は小鹿野町の個人の所有ですが、複製が三峯神社の博物館に飾ってあります。（資料六参照）

長瀬町の岩根神社には、地元の絵師である今井琴谷が描いた絵が残されています。鋭い目で満月を見上げているオオカミで、これにも前足の爪が描かれています。絶滅したとされる明治三十八年の二年前に描いたものです。

三峯神社にはオオカミを描いた大きな絵馬が奉納されています。大分薄れてしまっていますが、かつて神社で発行した絵葉書には色が鮮やかに表れていました。雌雄の親オオカミの足元に三頭の子オオカミが描かれています。三峯神社ではかつて産立（うぶたて）という神事がありま

した。遠くの山中からオオカミの際だった遠吠えが聞こえると、これは子供を産んだのだと言って、神社では赤飯を炊いて山に持って行くのです。『日鑑』という日誌には、江戸時代に何度もその記録が出てきます。

明治時代の初め、三峯講で訪れた講員のひとりが書き綴った『三峯山道中記図会』という紀行文があります。今の千葉県の佐倉からやって来て宿坊に泊まると、明け方布団の中で動物の鳴く声が盛んに聞こえてくる。神社の人に聞くと、あれはお犬様の声だよという答えが返って来た。それを聞いた作者が、そのオオカミの様子を絵にしたのです。オオカミを実際に見た訳ではないのでしょうが、痩せてあばら骨が浮き出た感じで数頭のオオカミを描いています。

戦の時に着る陣羽織の背中にオオカミの絵が描かれたものがありました。麻の生地にも墨で描いたもので、非常に迫力あり私も気に入って、特別展のポスターに使ってみました。ただ、どこかの誰が着たものか分かりません。背中に変わった家紋が入っているの、家紋からも調べてみたのですが分かりませんでした。

三峯神社で頒布した掛軸の中にもオオカミの姿を刷ったものがあります。これらも作者は森玄黄斎です。江戸時代には三峯神社も神仏混淆だったため、観音様のお姿の下に御眷属として黒と白の二頭のオオカミが描かれています。

昔の鉄道のポスターで三峯神社、秩父神社、宝登山神社の「秩父路三

社めぐり」というのがあり、オオカミの姿が大きく描かれています。いつごろのものか不明なので、地元の観光協会や秩父鉄道に問い合わせてみたのですが、分かりませんでした。ちなみにこれは三峯神社の拝殿前にあるオオカミの像を絵にしたものです。三峯神社の境内にはたくさんオオカミ像がありますが、ブロンズ製はこの一対だけで、しかも文化六年という古いものです。

宝登山神社には、日本武尊が野火に襲われた時にオオカミが現れて火を追い払ってくれたという言い伝えがあります。火を止める山で「火止山」、これがのちに「宝登山」になったと言われています。宝登山神社も江戸時代には神仏混淆で、宝登山大権現に御眷属の二頭のオオカミが付き従っている様子の木像が伝わっています。

オオカミ信仰アラルト

オオカミを祀る神社では、拝殿前や参道に必ずと言っていいほどオオカミの像があります。ほとんどは石像ですが、拝殿内に木像を安置している神社もありました。今回、特別展のための調査では、十八社で計五十対もの像を確認することができました。最も多いのがやはり三峯神社で十五対もあり、最古は寛政九年（一七九七年）の木像です。境内には森玄黄斎が彫った石像もあって、怪獣のような表情はとてもオオカミと思えない変わり物です。

旧荒川村に猪狩神社という神社があります。「猪を狩る」まさにオオカミを祀るにぴったりの名前ではないでしょうか。ここの石段脇にある



(資料7) 猪狩神社のオオカミ像

石像は、非常に迫力があり靈氣すら感じられるものです。これは昭和八年に小鹿野町の石工に造ってもらったものですが、この像には変わった伝説があります。石像が出来上がると村人らは大八車に石像を載せて山道を運んで来ました。途中で日が暮れたため宿を借りる事にしたのですが、そこで不思議なことが起こりました。寝床にいとオオカミの遠吠えが聞こえてきたのです。翌朝、庭に置いてある石像を見に行くと、その回りにオオカミの足跡がたくさん残されていていました。人々は石造の出来栄えが素晴らしいので、オオカミが喜んで出て来たのだろうと話合ったということです。興味深いのはその年代です。昭和八年の段階で村人らはまだオオカミの存在を信じていた。秩父の人たちにとってオオカミは、昭和の時代になってからも身近な存在だったのかなという気がします。(資料七参照)

最後に「送りオオカミ」の話しましょう。今ではこの言葉は男性の甘い言葉に騙されないようにという意味で使われていますが、本来はそうではありませんでした。旧都幾川村に伝わる送りオオカミの話はこうです。秩父に出掛けた人が峠を越えて村に戻ろうとすると、途中から一匹のオオカミが後をついてくる。襲われるのではないかと不安に思いな

が自宅近くまで戻ってきたとき、「オオカミ様送って下さりありがとうございます」と言うと、そのオオカミはこっくりとうなづいて帰って行ったというのです。このように日本のオオカミは悪者ではなかったという話はあちらこちらに伝わっています。

※講演では多数の資料をスライドで紹介したのですが、本稿ではその一部しか載せていません。特別展の内容や資料の詳細を知りたい方は、特別展図録「神になったオオカミ」(七〇〇円)を郵送販売していますので、県立川の博物館研究交流部(〇四八・五八一・八七三九)までお問い合わせください。

(文責事務局)



(資料8) 各社のオオカミのお札(三峰神社と宝登山神社は除く)

平成三十年七月五日

福島県田村市に植林した後の視察（四回目）

毎年恒例となった田村の森の視察に六人で行って来ました。四回目で、すから二〇一四年四月六日に植林した木々は四年と四カ月経ったわけである。どこまで大きくなったのか早く会いたい気持ちになる。



一番高いと思われるブナの高さ昨年310cm→420cmと1年間で110cm伸びました。
胸囲は17.5cm

<手帳にメモした木々の成長>…高さと()内は胸囲

ブナ…330cm(11.0cm)、365cm(15.0cm) 340cm(15.5cm)

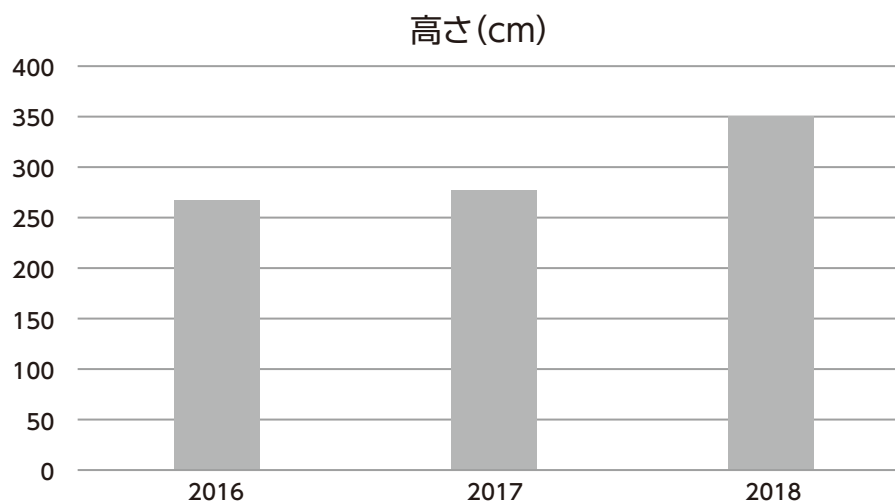
ミズナラ…350cm(11.0cm)、260cm(7.0cm)

栗…340cm(7.8cm)

ヤマザクラ…260cm(2.0cm)

ポット苗から育てたブナ…60cm

守
谷
裕
之



四年目になると木の育ち具合も勢いが付く。

<ポット苗から植えたブナ>

自生の木々の勢いは強く後から植えたポット苗は日陰に追いやられる。それでもブナは力強く育っていた。植えた苗は殆どがしっかりと根を張って葉を茂らせていた。



道を切り開きながら進むと植えたブナが次々に現れて来た



ポット苗から植えたブナ、当時の竹の支柱が残っている

ブナは陰性植物と教えてくれたので調べてみると…日照量の少ない場所でもよく生育できる植物を総称している。その他にシラビソなどの幼樹、森林内の草本類、シダ植物・コケ植物など。

<大池さんからのコメント>

- ・実生の松と杉が多く観られた。
 - ・トチの木、ハリギリも大きく成長。
 - ・奥秩父と土壌の違いによるものなのか。
 - ・ブナ、ミズナラはもはや苗木ではなかった。
 - ・生存競争の中で日陰に甘んじ、じっと耐え成長する苗木も少なからず見られた。中には2メートルを超えるものも見られた。競争し合いながら苗木は育っている。その成長を妨げるクズ、山芋、やまぶどう、さるなしなどのつる性植物がからみついている。
- 成長した苗木よりはるかに繁殖力旺盛なのがオオバアサガ、ウルシ系のハゼ、萩、小さなとげを持つクマイチゴ

<二つのアドバイス>

- ① 田村森林組合の吉田さんが6月の初旬は草がまだ伸びきっていないので刈る時に楽に中に入ることが出来る。
また、下草を綺麗に刈るとツル性の植物が勢いづくのであまり綺麗に刈らない方が良い。

② 小室さんからのアドバイス

密生状態に広葉樹の木々はこのまま10年位は手を付けず競争させて、強い木々だけを残すようにした方がいい。
下手に下草刈りをしない方がいい。せいぜいつる切りをする程度にしておく。



ホオノキ



2018年度上半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

和名倉山は、64年（昭和39年）と69年（昭和44年）に山火事が発生し、多くの樹木を焼失した。その跡には成長の速いカラマツを植林するなど、山の復興が図られた。同時期、林業の衰退で山での仕事も少なくなり往来が激減し、多くのルートが2m以上のスズタケで覆われ藪の山となってしまった。

そのような和名倉山を以前のような水を育む山に還元するために、97年埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会が活動を始めた。その後、NPO法人百年の森づくりの会として事業を拡大して、00年までに失われた道の復元を行ない、01年には樹木の生長が遅いところに、和名倉山の在来種であるブナの苗を植林し始めた。植林を始めると、鹿による食害に悩まされ、植林よりも、現有樹木を守るほうが先と考え、現在は現有樹木に鹿よけネット巻く作業が主になっている。03年には旧大滝村村有林の管理小屋だった仁田小屋を改修しこの事業のベースキャンプとして使用している。この小屋は会員の力でログハウス風に作り上げられた。（なお、和名倉山は山頂が県界でない埼玉県山々における最高峰である。）

2017年度上半期

11月18・19日 第41回植林ワーク

(仁田小屋整備・植林地整備)

6月16・17日 第42回植林ワーク

(仁田小屋整備・植林地候補地下見)

今年度の上半期ワークは、例によって6月の実施となってしまう。高校生（いずみ高校山岳部）の都合である。参加者はいずみ生4人と他6名の総勢10名である。少数精鋭ということである。車の都合もあり、1年生だけの参加、ちよつと不安であるが、楽しみもたくさんある。

まずは、搬入物品をそろえる。物品は旧大滝小学校三峰分校に保管されているネットとポールである。この分校は、我々のこの活動（百年の森



づくり)の当初のイベントを実施するときに借りた場所、以来二十年ほど借りている。ここは、我が会だけでなく、埼玉県高体連登山専門部、埼玉県山岳連盟の仲間も情報収集・情報交換という森づくり活動で使っている。

実は、(写真上)この分校の山側斜面の土砂が雨で流出し斜面の大きな木がいまにも倒れかかりそうである。現在、対応策を検討中である。(写真下)いずみ生の荷揚げ姿。毎年恒例ではあるが、新入部員には、可否は聞いたことはない。先輩たち

がどう伝えているかも聞いたことはない。(写真上)林道は五月の豪雨のため、また数か所で土砂崩れがある。これも「山の営み」である。仁田小屋に着くと、早々に薪割りである。今年の一年生も初体験だそうだが、のみ

込みが早い。

和名倉山の様子としては、やや鹿の活動は鈍っているように感じているが、今回のワークでは数か所で、新たに木の皮をめくった跡が見つかった。鹿の頭数は減ったのかもしれないが、スズタケが枯れたことによって、鹿の食が満たされずまた被害が起こることが心配である。



また、前述のように五月の荒れた天気によって倒木があちらこちらにあり、鹿除けネットが壊れてしまった。もうこのネットを張る方法は断念したほうがいいと思われる。そこ

で、最近おこなっている一本ずつネットを巻く方法を推進しようと考えている。写真上は杉の木、写真下は落葉松の木である。以前はあまり被害を受けていなかった木だ。見境がなくなったのか、実は、鹿以外のしわざなのか、わからないがあまり極端なことにならないよう対処しなければならぬ。仁田小屋の下部にネットを敷きつめる方法で鹿除けしている。(写真上下)



鹿は足がネットに絡むことを嫌いようである。ネットを敷いたところには踏み込んだ形跡がない。下の写真の左側の植物は「ハシリドコロ」で、鹿は嫌っている。このネットを敷く方法を次回拡大したいと考えている。この方法では落ち葉が堆積しやすいのでネットが足に絡む効果が薄れるかもしれないが、堆積物が残ることによって昆虫などの生き物を繁殖させる効果が期待できる。次回のワークで実験を始めることにする。

次に、新植林地についてである。長瀬の畑にある二百本のブナの苗を和名倉山に植林したく植林候補地を探している。今回林道終点である地点(写真上)を候補に挙げた。ここは、林道沿いなので観察に行きやすいのだが、斜面が急で、土が少なく、県の管理者も植林をあきらめ



た土地だそうだ。という訳で、再度候補地を検討する予定でいる。最後に、ナシ尾根沿いの道の最良ルートファイディングを試みている。このルートは水場は得られないが、和名倉山への最短ルートになる。実はこのルート上1300m付近がスズタケの枯れ野原(写真下)である。ここもブナの植林候補地として考えているが、いろいろな課題がある。次回の報告を乞うご期待！



2018年4月15日(日)、5月13日(日)、8月18日(日)

長瀬町宝登山下刈り活動報告

4月15日(日) 晴天 7名参加

今年は、春が早くて三月中に櫻が開花し4月には、緑が濃く山一面を覆いつぶしました。

午前8時30分には、本日の下刈りメンバー7名が揃って植林地に入りました。

メインに東の急斜面の下刈りを据えて出来たらツツジの北面(ロープウェイ側)もやるという手順を決めました。半日で目標をクリアしました。

反省点ですが今年は、春が早く来たといっても4月はまだ樹々が芽吹いたばかりで下草は、動き出していない。1ヶ月ずつ作業予定を移動したほうがよいのではないのでしょうか。良い汗をかって作業終了。

5月13日(日) 晴天 7名参加

メンバー8時30分には集合 9時30分作業開始

上部の櫻・楓・栗は、樹勢も大きくなり根を張っている様、たくましくなった。下草もそれに負けず野バラ、クズも生繁っていました。北側つつじ植栽地と東側急斜面の下刈りをできるだけやる方針。13:00には終了、引き上げ。来年は、7月に一度、手が入るといいのですが。

6月10日(日) 雨で中止

8月18日(日) 晴天 52名参加

参加者は9時集合。久しぶりに百年の森づくりの会の旗がたなびくなか、50余名が結集。(主に三井住友損保の社員&代理店 小室常務の司会で小林理事長の挨拶後、現場に向かいました。4班に分れて10時から作業開始。各々、下刈鎌を手に服装も長ズボン長袖シャツの作業着と三井住友さんも手慣れていました。みっちり1時間半、斜面がきれいに道もきつきりとして栗ももう少しで笑みそうで森ももう少しで大人になりました。手慣れた下刈でした。各々手にした鎌に砥石をかけて終了しました。参加された皆さんには、本当にご苦労さまでした。

(事務局)



平成30年度

第11回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の平成30年度第11回通常総会が、6月3日(日) 埼玉教育会館において開催されました。

当日は、平成29年度事業報告・収支決算案、平成30年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

総会終了後、「神になったオオカミ」秩父山地のオオカミとお犬様信仰を知ろう」と題して、埼玉県立川の博物館研究交流部長の大久根茂氏による記念講演会を開催しました。秩父地域に何故お犬様信仰が多いのか、人とオオカミの関わりなどについて有意義なお話を伺い、成功裡のうちに終了することができました。

(講演録は別途記載)





キツネのカミソリ

和名倉百年の森 第36号 2018年10月 1 日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 小林公彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1 コムナーレ9階

さいたま市市民活動サポートセンター内 メールボックスA-71

TEL/FAX：0480-22-3131

<http://www.100nen-forest.org> e-mail：info@100nen-forest.org